

長野県立歴史館たより

2025年 冬号 vol.125



特集

霊場小菅^{こすげ}

～飯山の遺産と文化～

霊場小菅 ～飯山の遺産と文化～

● 小菅の里及び小菅山の文化的景観



写真① 初夏の小菅集落

集落の中央の道から視線をそのまま上に転ずれば、関田山脈の峰を越えて妙高山が厳かに立ち、まるで峰越に阿弥陀様の頭を拝すかのような構図が目に入ります。

小菅の集落は妙高山を西に見るように計算されてつくられたとも考えられます。

五穀豊穡や天下泰平を祈願して行われる「柱松柴燈はしらまつさいとう神事しんじ」は北信濃の



写真② 柱松柴燈神事

柱松行事として、2005年(平成17年)2月に国の重要無形民俗文化財となりました。現在の柱松行事は、3年おきに7月15日以降の最初の日曜日に行われています。

このように小菅の集落は、穏やかな山村の原風景を感じさせる一方、民家とともに集落に点在する宗教建築、集落の中央を貫く参道、石積みを用いた計画的な地割などが、現在でも残っています。

● 小菅山開山の祖 役小角えんのおずぬ

2025年(令和7年)に行われた青森のねぶたの一つに役小角の作品がありました。役小角は飛鳥時代の呪術者で、東北地方の金峰山きんぶせんで役小角が衆生を救済するのにふさわしい仏を出現させようと祈願し、蔵王権現を湧出させたといわれています。また、現在の伊那市荒井内の萱地区で携行していたそばの種を村人に渡したのが、信濃でのそば

栽培のはじまりとされます。また、戸隠も役小角によってそばが伝えられたという伝説がある地です。役小角の伝承は日本国内に多く伝わっていますが、実在の人物であったことを確認できる史料は非常に限られていて、『続日本紀しよくにほんぎ』に数行あるのみです。



写真③ 木造役小角像(奥院蔵)

山伏たちは全国の山々を修行の場とし、そうした山伏たちの修行場に建てられた山岳寺院の一つが小菅山だったと考えられます。1542年(天文11年)に制作されたという「信濃国高井郡小菅山八所権現並小菅山元隆寺来由記」(以下、来由記)が、室町時代に金峰山、熊野山などの諸山で役行者の伝承を含んだ「信州高井郡小菅山元隆寺縁起」(以下、縁起)と同時期につくられたのも、当時の中央修験とのつながりを感じます。

● 隆盛を迎える中世小菅

北の市河氏と南の高梨氏の間に位置した小菅は、鎌倉幕府滅亡後も安定はしませんでした。1356年(正平11年)の「市河経高軍忠状」から小菅が戦場になったことがわかります。小菅の地が重要視されたのは、北に越後、南には善光寺平へと通じる交通の要地であったことによります。

来由記によると、1365年(正平20年)春に小菅寺が火災にあったので、下水内郡尾崎三桜城主で当時水内と高井の両郡守護とされた泉氏重うじしげが、室町幕府將軍義満の命を奉じて再建したといわれています。1406年(応永13年)には、加耶吉利堂かやきりどうが建立され、堂内には近隣の土豪らによって板絵著色観音三十三身図(応永年間在銘)が寄進されまし

た。伝説によれば1429年（永享元年）にも焼失の憂き目に合ったといいますが、1430年（永享2年）からは4年の歳月をかけて、元隆寺の宮社坊中寺観が再建されました。1508年（永正5年）9月には、奥社内の宮殿が建立され、1546年（天文15年）には、桐竹鳳凰文透彫奥社脇立二面が制作されています。これらの記録からすると、16世紀半ばまで小菅山では造営が営々と続けられており、それを可能にするだけの繁栄があったことが窺えます。



写真④ 左：板絵著色観音三十三身図 県宝（小菅神社蔵）
写真⑤ 中央・右：桐竹鳳凰文透彫奥社脇立二面 県宝（小菅神社蔵）

● 戦火にさらされながらも再興する小菅

縁起によると、川中島の戦いで武田氏の軍勢によって元隆寺は兵火に遭い、本堂を除く堂塔はことごとく焼失したとされています。小菅山を含む小菅荘一帯も戦禍に巻き込まれたことは間違いないでしょう。

一方、1557年（弘治3年）、長尾景虎（上杉謙信）が元隆寺に戦勝祈願の願文を奉納しています。この時点で小菅が武田の兵火にあったとは考えられません。しかし、1564年（永禄7年）8月1日に謙信が更級八幡宮に宛てた願文には「戸隠・飯綱・小菅・善光寺の供僧を断絶し、社領を没収し、燈明の光消え、唯一天の残月あり」の文があり、同年の越後弥彦神社の願文にも「戸隠・飯綱・小菅三山、善光寺を始め、その他在々所々の坊社供僧断絶をなし、寺社領欠け落ちの故、御燈明辰已下し、光塔仏閣際限なく焼却す」とあることが

ら、この時期までには小菅が焼け落ちていたことは間違いなさだろうと推測されます。これらのことから武田軍が小菅に火をかけたと考えられるのは、1557年～1564年の間であり、1900年（明治33年）にできた『信濃宝鑑』や『下高井郡誌』（1922年）にあるように1561年（永禄4年）の可能性が高いとの考えがあります。

その後も繰り返し兵火にさらされたため、元隆寺に常住する者はなく、1600年（慶長5年）頃には完全に廃墟と化してしまったといえます。しかし、武田領となった後の1579年（天正7年）2月25日付で、武田勝頼は「小菅」と越後赤沢の間の連絡の便を図るため、人家を置かせており、小菅の地の戦略的・交通上の重要性は存続していたと思われます。本能寺の変後、小菅は越後国の上杉景勝領となり、情勢が安定するとともに奥社本殿が再建されました。完成の2年後、1593年（文禄2年）には、越後の金丸与八郎が鉄製鰐口を奉納しています。小菅の宗教的権威は依然として衰えていなかったことを示しています。



写真⑥ 鰐口（小菅神社蔵）

江戸時代に入っても、1606年（慶長11年）に皆川氏より絵馬2面が寄進されており、小菅山の聖地としての性格は存続していたと思われます。江戸時代を過ぎ明治になると、神仏分離によって、大聖院別当職が神職に就き、仏式什器を菩提院に移管する一方、小菅社八所大神となり、1890年には小菅神社と改称します。ここに、今日の直接的な起源にあたる小菅神社が成立したのです。

人々の日常的な暮らしの場と宗教空間の共存という小菅の特徴的な風景は、「小菅の里及び小菅山の文化的景観」として2015年（平成27年）に国の重要文化的景観に選定（県内2例目）され、次世代へと引き継いでいくことが求められています。

（黒川 稔）



米山一政寄贈資料の紹介

— 長野市松代町 竹原笹塚古墳出土の馬具について —

当館では、県内での発掘調査により出土した遺物に加え、長年にわたり郷土史研究に尽力した地域研究者の方々から寄贈された資料も収蔵しており、米山一政資料もそのうちの一件です。

米山一政氏は、1911年（明治44年）に埴科郡倉科町（現千曲市）に生まれました。長野県師範学校専攻科を修了後は、更級・埴科郡下の小学校で教員として勤務する傍ら、生まれ育った北信濃地域を中心に、郷土史研究に邁進しました。1951年（昭和26年）に信濃史料刊行会が再編成された際には、信濃史料常任編纂委員も務められました。

米山一政寄贈資料のなかに、長野市指定史跡である竹原笹塚古墳（長野市松代町）から出土した馬具があります。竹原笹塚古墳は、径26m、高さ3.6mの円形積石塚古墳です。埋葬主体は全長6.8mの横穴式石室構造の合掌形石室です。6世紀頃の築造と考えられています。馬具は、轡や雲珠、絞具、飾り金具などが出土しています。

轡とは馬を制御する道具で、銜を馬の口に噛ませ、その両端に鏡板を付けて引手を手綱に繋げて使用します。本古墳から出土したと伝えられている轡は、銜、鏡板、引手が揃いで遺存しており、当時の馬具の構成がよくわかります。楕円形の鏡

板は、縁に珠を連ねたような文様が巡り、中央には十字文が施されています。

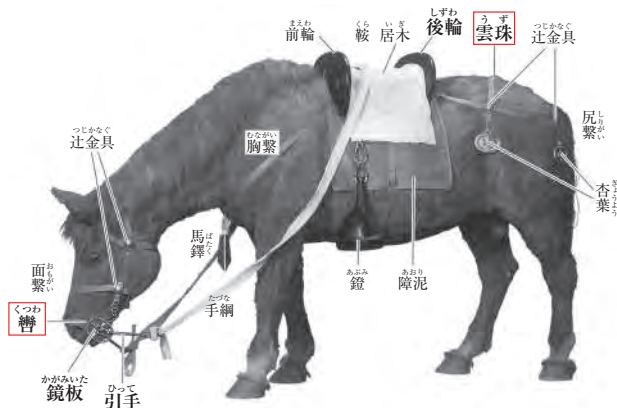
雲珠は鞍を馬の背に固定するためと、馬に装飾を施すための金具です。鞍から馬の尻にかけて回す尻繫というベルト同士を繋ぎ、尻まわりの装飾具全体を吊るすために用いられます。本古墳から出土したと伝えられている雲珠は、鉢の部分に円形の文様を打ち出した無脚雲珠と、鉢の頂部に花形の装飾を施した八脚の雲珠です。鉄地に金銅を被せたつくりで、肉眼でもわずかに鍍金が確認でき当時の華やかさが窺えます。

シナノにおける初現期の馬具は、長野市榎田遺跡から出土した5世紀第2四半期の木製の鞍（後輪）や5世紀第3四半期の木製の壺鐙があり、善光寺平においては遅くとも5世紀中頃以降には乗馬の風習があったと考えられています。この馬具を身に着けた馬がいたことや、新来文化の受容、伝播に関わった被葬者像が想像できます。

寄贈された資料は、地域の歴史を物語る大切な財産として、後世へ受け継がれていきます。

今回ご紹介した馬具は、常設展示室の古墳時代「科野の馬と武人」コーナーに展示されています。ぜひ足をお運びください。

（水科汐華）



古墳時代の飾り馬（模型・当館蔵）と馬具の名称



伝 竹原笹塚古墳出土 馬具類（当館蔵）

①轡 ②雲珠 ③絞具 ④飾り金具

二百万人の勝利

—浅間山米軍演習地化反対運動史—

「浅間山米軍演習地化絶対反対署名」



写真1 長野県浅間山米軍演習地化反対期成同盟1953.10.1
『二百万人の勝利』(当館蔵)

例年になく暑かったこの2025年（令和7年）夏、アジア・太平洋戦争終結から80年目を迎えました。戦争は終わりましたが、日本にはいまだに沖縄をはじめとして多くの米軍基地が存在しています。将来的に、これらの基地は日本から無くなるのでしょうか。国民にとっての本当の平和とはどういうものなのでしょうか。今年のような節目の年に改めて考えてみてはいかがですか。

戦後間もない1953年（昭和28年）4月2日、日本有数の避暑地でもある静かな町・軽井沢に激震が走りました。日米行政協定合同委員会による「浅間山米軍演習地設置」の申し入れです。その内容は、冬季山岳戦演習の仕上げの場として、標高1,400mから火口までの5,000町歩（49.5km²）を使用したいというものでした。

軽井沢町議会は4月17日に演習地設置反対を決議し、5月3日の町民大会を経て、反対運動は軽井沢町から全県へと広がっていきました。5月27日、県下71団体の代表が長野市の長野県婦人会館に集まり、県民代表者会議が開かれ「長野県浅間山米軍演習地化反対期成同盟」が結成されました。その中心となった団体の一つに「長野県連合青年団」がありました。

6月7日の県民大会には、「二百有余団体、約五千人の県民」が参加し、その後の反対運動の中心的な活動として署名運動が行われました。写真1の運動史のなかには、合計すると148,965人の署名が行われた記載があります。また当館に

は、その署名の現物の一部が北佐久郡を中心として、北は栄村から南は上松町までの県内各地、約28,000人分の「浅間山米軍演習地化絶対反対署名」（写真2）として残されています。そして、4月の米国からの申し入れから3か月半後の7月16日、ついに反対運動が実を結び、浅間山演習地使用取消しが正式に決定しました。

現在の日本は、今も存在する日米合同委員会の決定には決して逆らえず、多くのことがアメリカの言いなりになっています。市民・県民・国民が一丸となれば、政府も動かし、米国も動かし、願いは叶えられるのです。この反対運動は、当時の県民の気概を感じることができる大きな出来事でした。

先日、沖縄のタクシーの運転手さんから「基地はない方がいいが、でも嘉手納では多くの県民が働いているし、いま基地がなくなったら中国が怖い。」という話を聞きました。現在沖縄に住む人たちにとって、基地は日常です。日本にとって、米軍基地とは、自衛隊とは、平和とは、これからも考え続けていかなければならない課題です。今回の史料（今年度ですべて公開）は、現在の日本を考える上でも重要であることがわかります。

（黒岩 隆）



写真2 「浅間山米軍演習地化絶対反対署名」(当館蔵)

長野県民の戦後再出発



写真①「長野県連合青年団 団旗」(当館蔵)

2025年（令和7年）、終戦から80年という節目の年、当館では夏季企画展小展示室にて、「戦後80年 長野県人の戦争体験～戦中のスケッチブック・日記が語るもの～」と題し展示を行いました。当時の人々が、8月15日とその前後を、どのように過ごし気持ちが揺れ動いていたのかを感じていただきました。そして令和8年所蔵品展「長野県民の戦後再出発」では、新出史資料を中心に、戦中から戦後の再出発に焦点を当てた、長野県民の姿を紹介します。

主な展示資料としては、1946年（昭和21年）2月22日に全国に先駆けて再結成された、長野県連合青年団（以下、県連青）の関係資料を扱います。戦争で疲弊した農村の立て直しと、自らの手で未来を切り開くことを志した青年たちの運動が、戦後、県連青として結実しました。県連青は終戦の混乱の中、農村社会の自治・民主化を目指した共同学習活動や、文化活動、浅間山米軍演習地化反対、原水爆禁止など、平和主義に基づく社会運動にも積極的に関わっていきました。その姿を資料から読み解いていきます。

満蒙開拓資料、そしてブラジル移民資料からは、長野県出身者による開拓移民の辿った、戦前開拓から戦後開拓まで連続した足跡を紐解いていきたいと思っています。

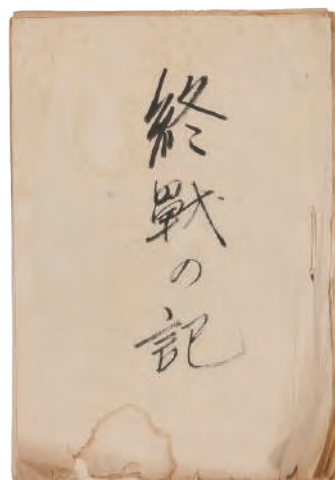
また、終戦直後にGHQの命令により、民間から接收された刀剣類が、1947年（昭和22年）に日本政府に返還されました。この通称「赤羽刀」もまた、戦後を象徴する歴史資料といえるでしょう。

さらに来年、2026年（令和8年）は、日本国憲法制定、そして初の女性参政権が認められ普通選挙が行われて、80年の節目の年です。女性たちが戦後をどのように見つめ、また闘い続けてきたのか、新憲法草案や普通選挙実施に対する意見が述べられた児玉勝子資料や、時代を反映した歌謡曲レコードなどを扱います。

戦後80年目を経て、2026年（令和8年）は、長野県成立150周年を迎え、現代史を中心とする新しい長野県史編さん事業が始まります。当館小展示室では、当館所蔵の16mmフィルムをデジタル化した記録映像の上映、修復・保存の必要な映像フィルムや写真などを展示し、史資料を行政資料と共に、後世に伝える県史編さんの重要性を伝えます。

長野県における「戦後」とは何だったのでしょうか。1945年（昭和20年）8月15日を終わりの日ではなく、再出発の日と捉えなおし、戦後の長野県民の姿をぜひご覧いただければと思います。

（鈴木幸香）

写真②「終戦の記」
(当館蔵)

考古資料課

考古資料課では、ボランティアさんたちに木製品（木器）の保存処理をメインにお手伝いをしていただいています。保存処理では、ポリエチレングリコール（PEG）という薬品を木製品の中の水といれかえていきます。水漬け保管していた木製品の洗浄、保存処理の工程を記録する「保存処理カード」の作成や木器に取り付けるラベルのラミネート加工、シルクスクリーンを使い木器を養生するための袋や布団をミシンで製作するほか、PEG処理液の拭き取りで使用するウェスをサイズ別に仕分ける作業などがあります。それぞれの段階で必要な作業を、ボランティアさんにもお願いしています。

保存処理カードの作成では、病院でカルテを作るように台帳を基に遺跡名や出土地点、処理番号などを記入し、遺物カードのコピーと木器写真などを貼り付け、そこに木器洗浄した日、薬剤など

を使って脱色・脱塩した日、PEG処理液を20・40・60・80・100%とそれぞれ濃度アップする開始日を記入していきます。

現在、保存処理を待っている木製品約15,000点を、効率よく進めるために立てた保存処理作業計画では、1シリーズ約300点、保存処理カードも300枚作らなくてはなりません。それを3～4シリーズ分用意するので、職員だけでは手が回りません。ボランティアさん達のサポートがあるおかげで、滞ることなく保存処理の様々な作業に集中することができるのです。（清水秋子）



木器処理室での作業風景

文献史料課



史料整理室での作業風景

文献史料課では、ボランティアさんに、古文書を中心とした紙史料の整理をお手伝いいただいています。主な作業は、史料に番号を付けるためのラベル貼りと、目録作成のためのデータ入力です。参加して下さるみなさんは、歴史に興味がある方、地域貢献をしたい方など動機は様々ですが、やはり多いのは古文書の学習に活かしたいという方です。古文書の読解に長けたボランティアさんには、目録作成に向け史料のタイトルや年代、内

容の概要などをパソコンに入力してもらっています。入力 ちょっと…という方には、史料に番号をつけるため、内容や形状に応じてラベルを貼ってもらっています。この作業では、虫食いや破損があるもの、クリップなどで留められているものなど状態を見て必要な処置もしていきます。いずれの作業も、職員や他のボランティアさんと相談しながら、自分のペースで進めることができます。また、整理する史料は江戸時代の村の記録や契約書、時には明治・大正の書類や書簡など多岐にわたります。様々な史料に出会うことができるのも、このボランティアの魅力の一つです。

このように史料への番号付け、目録作成へのデータ入力を通じ、古文書を保存し、多くの方に活用してもらうことができますようになります。古文書の整理について、当館では年間1万件を目標としていますが、それを達成するには、ボランティアさんの力が欠かせません。

（新井寛子）



INFORMATION

インフォメーション

■ 2025年(令和7年) 12月～ 2026年(令和8年) 3月の行事予定

12月

企画展・所蔵品展

講座・イベント

休館日
1・8
15・22
28・31

知の連携フォーラム

12月5日(金) 13:00～15:30

近世史セミナー

12月6日(土) 13:00～15:35

県立歴史館講座④

12月13日(土) 13:30～15:00

講師：町田勝則(当館総合情報課)
テーマ：館蔵品原始
ー開館30年のあゆみⅡー

考古学体験講座③

12月14日(日) 13:30～15:00



1月

冬季企画展

霊場小菅

～飯山の遺産と文化～

1月10日(土)～3月1日(日)

■講演会①

1月17日(土)

「小菅の魅力」

講師：笹本正治(当館特別館長)

■講演会②

2月14日(土) 13:30～15:00

「遺跡からみた小菅」

講師：丑山直美氏(飯山市教育委員会)

■ギャラリートーク

①1月24日(土) 13:30～15:00

②2月28日(土) 13:30～15:00



KOAの日(歴史館無料開放)

1月17日(土)

県立歴史館講座⑤

1月31日(土) 13:30～15:00

講師：林 誠(当館総合情報課)
テーマ：丸山晩霞と日本の水彩画



県立歴史館講座⑥

2月21日(土) 13:30～15:00

講師：久保浩一郎氏(佐久市教育委員会)
テーマ：日本列島最古の石刃器群
ー佐久市香坂山遺跡ー



県立歴史館講座⑦

3月14日(土) 13:30～15:00

講師：水澤教子(当館総合情報課長)
テーマ：縄文時代の社会を考える
ージェンダー、階層、そして戦争と平和ー

古文書入門教室

3月20日(金・祝) 10:00～12:00

親子映画会

3月20日(金・祝)・3月21日(土)・3月22日(日)

2月

休館日
2・9
12・16
24～27

3月

休館日
2・9
16・23
30

令和8年 所蔵品展

長野県民の戦後再出発

3月14日(土)～6月14日(日)

表紙写真の解説

奥社入口鳥居

役小角が修行したという岩窟が奥社の出発点で、この鳥居から奥社まで1時間弱要します。そこに至るまでの途中には、鎧石、御座石、船石、愛染岩、不動岩など、伝説として語り継がれている場所が続きます。

元々は「八所権現」と呼ばれていましたが、明治2年(1869年)に「八所大神」に改称されました。

行事アルバム

***** 歴史館出前講座 *****



9月27日(土)に、歴史館出前講座を大桑村で開催しました。大桑村教育委員会の御協力により、当日は大桑村歴史民俗資料館を会場に、村民の皆さんにお集まりいただきました。「観光パンフレットにみる昭和戦前の信州 描かれた木曾の観光地」というテーマで、参加者の皆さんは、熱心にメモや写真をとりながら聴講していただきました。また、「観光という視点から地元の歴史を知ることができ、面白く勉強になった」という声を多くいただきました。

* 古代のボードゲーム「かりうち」大会 *



10月19日(日)に秋季企画展関連イベントとして、「古代のボードゲーム「かりうち」大会」を開催しました。「かりうち」は、奈良時代に流行した双六のようなゲームです。遺跡でみつかった土器や現在韓国で遊ばれているゲームをもとに奈良文化財研究所が復元したキットを用いて、小中学生8名が対戦しました。回数を重ねるごとに熱く盛り上がる様子が印象的でした。参加者からは「古代の人と同じ体験ができた」「古代や歴史に興味がいいた」「学校でもやってみよう」「家でも作って対戦したい」「第2回があったらまたやりたい」などうれしい声が聞こえました。

長野県立歴史館たより 冬号 vol.125

2025年(令和7年)11月28日発行

編集・発行 長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市大字屋代260-6
電話 026-274-2000(代) FAX 026-274-3996
E-mail: rekishikan@pref.nagano.lg.jp
ホームページ: <https://www.npmh.net/>

印刷 有限会社アツツロー